

『内村鑑三 信仰・生涯・友情』を読んで

山本先生の新著「内村鑑三」は、「信仰・生涯・友情」の三部より成り、千頁を越える大冊ですが、実質的に新著といふべきものは、その第一部「信仰問答」であります。これは、その第二部「ベル書簡」、第三部「宮部書簡」をも含めて、先生がこれまでに内村に関して物された著書、編訳書、「聖書講義」誌上の論文、さらに「内村鑑三全集」五十巻の解説などの総括であり、それらによつて提示された先生の内村観の結論である、と言つて宜しいかと思ひます。

そう考えれば、この「信仰問答」二九〇頁は必ずしも大著ではないかも知れません。また、旧著にない新しい内村論が展開されている、というわけでもありません。しかし、その内容の豊富なこと——そこには福音の根本義はもちろん、キリスト教とその信仰における、およそ考え得るあらゆる問題が網羅されています——と、その問題解明の痛烈、深刻なこと——先生は「別の角度から端的に問題の解明に当たろう」とされた、と言つておられます——において、実に偉大な書でありま

す。

山本先生は「まえがき」において、本書執筆の経緯を次のように語っておられます。「内村鑑三は何を信じ、どんな信仰に生きていたか。彼が生涯を捧げて日本に伝えたキリスト教はどんなキリスト教であったか。これは著者にとっては自分の霊と肉との生死を決定する問題であった。そのため著者は若き日に内村鑑三によつて初めてキリスト教に接して以来、自分自身の問題として必死にこれと取組み、その他の事はほとんど忘れて今日に至つた。」このようにして、前後約三十年、ほとんど先生の半生を費して成つた本書は、単なる偉人伝ではありません。これは正しく、福音信仰のみによつて結ばれた二つの靈魂たましいの、激しくも美しい触れ合いの記録であります。あえてこれを伝記と呼ぶならば、先生の言われるように「内村鑑三の人物伝というよりは、彼の信仰伝」であり、偉大な伝記がすべてそうであるように、本書もまた、内村鑑三に託して語られた、著者山本先生ご自身の信仰と精神の表白に外ならないのであります。

「内村の信仰とキリスト教との本質と精神とを明らかにする」に当たつて、先生はいかなる方法

を採られたか。これについて先生は、「内村の神学や思想、あるいは教義や信条などを論じることはず、内村が生涯に当面した約三十の信仰上の実際問題……を解説することによって、内村鑑三自身をして内村鑑三自身を語らせることにとめたい」と言っておられます。内村を「科学の忠信な学徒」であるとする先生は、ご自身もまた、広汎に内村全集を引用して、極めて科学的に「どこまでも事実を追って、事実を」明らかにしようと努めておられます。そして問答形式の文体は、このことと相俟って、読者を単刀直入、一気に問題の核心へと導き入れてしまいます。

先生はここに三十にのぼる実際問題を扱っておられるのですが、このうち例えば「花巻非戦論事件」「高橋つさ子事件」「小山内薫事件」などはどちらかといえば個人的な小さな事件であって、その重要性を疑う向きもあるかも知れません。しかし先生は、先生独自の信仰的洞察から、内村の生涯の中で埋れていたこれらの事件を、彼の精神と人物の真髓を表わすものとして、いわば新たに掘り起こして、これに福音的説明を施されたのであります。

事実を明らかにすることは、決して容易なことではありません。それには厳密な考証と公正な判

断、広い視野と深い洞察とが必要です。それのみでなく、事実在即してものを語ることは、見えざるものに対する恐れなくしては、為し得ません。なぜなら、事実は、旧約の預言やイエスの譬がそうであるように、時と共に働いて、人を厳しく審いてしまうものだからです。本書が「事実の書」であることには、深い意味があると言わねばなりません。

矛盾と謎の人と言われる内村を、果して首尾一貫した全人格的存在として捉え得るか。これが、およそ内村伝を編もうとする者の、最大の関心事でありましょう。数ある内村の伝記も、結局この問に答えようとする試みに他なりません。

それでは山本先生は、一体何をもって、この多彩で不可解な人物の統一原理とされるのでありましょうか。先生は特に「無教会論争」（「贖罪論争」と併せて）の一篇において、これに明確に答えておられます。

内村の無教会信仰を、今日のいわゆる無教会主義と峻別し、その理由を内村の贖罪信仰に帰する山本先生の主張は、「内村鑑三永眠二十五周年記念講演」（一九五五年、角川新書「内村鑑三」七〇頁以下参照）において、夙に明らかにされたこ

とであり、その後も信仰著作全集第十二巻、同第十八巻、日記書簡全集第四巻の解説において、くり返し述べてこられたところであります。

わたくし個人としては、日記書簡全集第四巻（一九六五年六月）の解説を読んだ時の衝撃ショックを、今なお生々しく覚えているのでありますが、それはそ

こに提起された問題の余りにも深刻で重大なことに、やつと思ひ至つたからでありました。これは単なる「無教会」論議ではない、「無教会」の歴史の詮索ではない、ましてや他人の信仰の批判などではない。ここで先生が問題とされていることは、実に福音の根本問題なのであります。

もしわたくしどもが、藤井の主張するように愛だけで救われるとすれば、また塚本の唱道する無教会主義によって信仰だけで救われるのであれば、結局人はキリストの十字架なしでも救われることになつてしまふ。それはパウロの言うように「キリストの死をむだにしてしまふ」ことである。これはわたくしどもの信仰生活の実際問題を左右するのみでなく、福音の真理が立つか倒れるかを決する由々しい大事であります。

内村鑑三の信仰の真髄は、十字架の贖罪の福音である。これはその回心の時から死に至るまで微動だもせず、終始一貫している。たとえ外見はい

かに混沌ケオスのごとく見えようと

も、その信仰において彼は常に整然たる整体コスモスであつた。そしてこの贖罪信仰から、その非戦論も、再臨信仰も、教会観も、伝道観も、自然観も、はたまた無教会主義も、すべてが出ていたのであり、その贖罪信仰のゆえに、彼は自らの主義さえも否定し、弟子たちからも決別して、独立自由の生涯を完うしたのであつた。これが山本先生の内村観であります。先生はこの一事を、三十の問題のひとつひとつにおいて粒々と克明に語っておられるのであります。

本書を一読した時の率直な感じですが（これは甚だ失礼な言い方になることを恐れますが、敢て申します）、わたくしはこの度あらためて、山本先生のものの方の霊的なことに驚嘆せざるを得ませんでした。わたしの存じあげている先生は、極めて常識的で、もつとも非宗教的な方であります。その先生が内村の生涯をえがくに當つて、終始「聖霊の働き」を重視し、強調しておられるのであります。

内村は矛盾の人であるばかりでなく、その生涯には謎とでもしか言いようのない事件が少なからずあります。離婚問題、北越学館事件、不敬事件、花巻事件、肉親との不和のことなどがそれであり

ます。そして内村伝の著者は、あるいは信仰的立場に立って彼を主義と確信の人とし、あるいは心理学的アプローチによって彼を分析し、あるいは社会的、歴史的観点から彼を評価して、それぞれに、いかにもしてこの謎を解明しようとするのであります。

しかし山本先生の見方は、これらと全くその類を異にします。内村におけるこの種の謎は、もともと彼の信仰が「神から示され、与えられ、さとされて信じた」：「神の信仰」であることによるのであって、人の合理的な説明を許さぬものである。これは内村個人の「神聖な秘密」であって、これ（聖霊）あるがゆえに、彼は「大きな混沌ケオスであると同時に、整然たる整体コスモス」であり、「矛盾の人であると同時に、そのままに、真理と生命にあふれていた」のである。先生は一貫してこの立場から、内村の生涯を見ておられます。それゆえ、先生の筆は問いつ答えつ、人に誤解を許さぬ明確さをもって進められています。人がもって好箇の話題とし、興味の対象とするような事柄に関しては、むしろ慎んで沈黙を守り、敬虔な恐れをもつて、謙虚に、その説明を内村の内に働き給うた方に委ねておられるのであります。

山本先生のこの内村観は、あるいは余りに偏っているかも知れません。しかしこれ以外に「内村をして内村を語らしめる」方法はありません。なぜなら、この内村観こそ、「キリスト教は宗教にあらざ」と宣言した内村の宗教観そのものであるからです。

本書はかくして、極めて独特ユニークな内村伝であります。次の先生のことばは、その独自性の秘密を語って余すところがありません。「しかしこの宇宙が、わたくしにとり、混沌ケオスから整体コスモスに変わり、聖書が矛盾の書から真理の書に変わった時、わたくしの内村鑑三もまた、いつか混沌ケオスの人から整体コスモスの人へ、矛盾と謎の人から真理と生命の人へと一変しました。」すなわち、先生の内村観は決して内村研究によって得られたものではなく、先生の信仰が生んだものなのであります。先生もまた、内村と共に「宇宙を心とし、聖書の生命に生きて」おられるのです。それゆえにこそ、先生は、その生涯を賭けて求め続けてこられた「神が内村鑑三をもつて日本に新しく始めたもうた新しいキリスト教」の真髓を、この「内村鑑三」一卷をもって明らかにしてしまわれたのであります。本書の永遠的価値は、実に此の一点にあると信じます。

(山本附記) 著者たる者にとり何よりもうれしいことは、著者の著述の精神を汲み取ってもらうことです。多くの喝采を博すること、沢山に売れることなどもうれしくないことはありませんが、このうれしさにくらべれば物の数でもありません。そして今ここに、畏友武藤君からこの知己の書評を寄せられたのであります。著者は「以て瞑すべし」であります。感謝なきを得ません。

(所載) 「聖書講義」二六〇号(一九六七年二月)